



宮司プレス 百四十号

彦島八幡宮 宮司 ニューズ

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 平成三十年十二月三十一日

◇宮司の柴田です。歳末に、日本列島を襲(おそ)った寒波(かんば)により、寒さ一入(ひと)しお)身にしみる昨今であります。いよいよ押し迫りました。明日は、いよいよ新年、平成三十一年です。本日の夕刻、大晦日(おおつごもり)の大祓式(おおはらいしき)と除夜祭(じよやさい)を御奉仕申し上げ、本年の全ての神事を滞りなく執り収めました。私にとりまして、宮司就任以来、十四回目の迎春(げいしゅん)となり、感慨(かんがい)深いものがあります。これも偏(ひと)えに、沢山の方々のお支えと御援助のたまものでありまして、心から感謝申し上げます。これからも、「敬神崇祖(けいしんすうそ)」の誠の心を忘れずに、一意専心(いちいせんしん)御奉仕申し上げます所存です。

◇さて、「平成最後の」という枕詞(まくらことば)が、乱れ飛んだ年の瀬でもありました。いよいよ明年は、天皇陛下(みくらい)が御譲位(ごじょうい)になりまして、二百年振りの御譲位(ごじょうい)となり、改元(かいげん)です。宮司プレスの第百三十九号にも記述(きじゆつ)しましたが、大化から始まって二百四十八番目の元号となります。明治からは、「一世二元」なのでありまして、天皇陛下(みくらい)が、お隠(かく)れ、崩御(ほうぎよ)されますと、改元が行われるのであります。この度は、御譲位により改元なのでありまして、私共は、天皇陛下(みくらい)と時間を共有できるのであります。少しおおげさですが、天皇陛下(みくらい)と時間を共有していることの証(あかし)が、「元号」といっても過言(かごん)ではありません。頻繫(ひんぱん)に改元されたのが、鎌倉時代でありまして、およそ百五十年間に使われた元号は四十八にもなりません。期間が二年も満たない元号も十二もあつたそうです。今年(ことし)は、明治維新(めいじいしん)五十年でしたが、明治からの元号は四つであります。その二百四十七ある元号で、一番長かつたのは、「昭和」です。二番目は、「明治」、それでは、三番目は、「平成」かと思いきや、今(ことし)から六百二十四年前の「応永(おうえい)」が、三十四年で三番目です。したがって、「平成」は、四番目に長い元号ということになります。一番多く使われた文字は、「永」だそう

でして、いつの時代も、永久(とわ)の平安や幸福の願いを元号にこめられたのでしよう。「パクス・エドガーナ」といわれる、およそ二百八十年間の天下泰平(てんかたいへい)の世の中をつくられた徳川家康公(とくがわやけいこう)は、江戸に幕府を開いたおりに、「元号を「元和(げんな)」とさうち、文武両道(ぶんぶりょうどう)の平和な時代を願われたのです。新しい元号には、どのような願いがこめられるのでしょうか。ちなみに、明治のマ行、大正のタ行、昭和のサ行、平成のハ行は、避けられるようです。残るのは、ア行、カ行、ナ行、ラ行、ヤ行、ワ行ですが、新しい天皇陛下(みくらい)の初めての国事行為(こくじぎゐ)である、「改元(かいげん)の詔(みことり)」を承(うけたまわ)り、新しい時代の幕明け(まくあけ)を迎えたいと切に願っています。残念ながら、予(あらかじ)め政府(せいふ)より発表(はつぷつ)されるそうですが、前述(ぜんじゆつ)した新しい天皇陛下(みくらい)の御即位(ごきせつ)された後(のち)の改元(かいげん)が、本来(ほんらい)の姿(すがた)なのであります。

◇私は、過日(かじつ)の二十六日に、およそ九百五十通の年賀状(ねがはじょう)を投函(とうかん)しました。十九種類の言葉(ことば)を墨書(ぼくしよ)し、印刷(しんぷつ)をしました。表(うら)の宛名(あてな)は、文明(ぶんめい)の利器(りき)のパソコン(パソコン)のソフト(ソフト)を駆使(くし)して印刷(しんぷつ)したので、どの言葉(ことば)がどなた(だんな)に届(とど)くか定(さだ)かでは

ありません。ちなみに、「雨過天晴雲破処」「明
浄正直勤務追進」「五日一風十日一雨」「日光照
万民月色清人心」「天恐地敬人愛」「三感四恩」
「日々是好日」「則神去私」「至誠則恒」「日清
日新日進」「神喜地喜人喜」「他力信で自力生」「隨
所主作 立所皆真」などです。すこし欲張り
すぎたかと反省しています。

◇毎月一回発行の、彦島八幡宮宮司ニュースと
銘打って発行を始めた宮司プレス、本来な
ら、百五十一号のはずですが、遅れの挽回(ば
んかい)の道のりは険(けわ)しいようです。
前号でお約束したとおり、今月二回目の発行の
運びとなり、一つ、遅れを取り戻しました、十
一ヶ月遅れの第百四十号の発行です。

◇さて、来年、平成三十一年の干支(えと)は、
「己亥(きがいの、つちのとい)」で、猪(いの
しし)年です。干支は、十干十二支(じゅっ
かんじゅうにし)の組み合わせです。全部で
六十通りですが、来年の干支は、三十六番目
です。十干は、木・火・土・金・水に二つずつ
割り当てられ、さらに陰陽も振り分けられ、そ
れぞれが意味を持っています。己は、陰の土
を表し、田や畑の土です。また、もともと紀
(き、すじの意味)をその語源としています。
草木が十分(じゅぶん)に繁茂(はんも)して
盛大となり、すじみちが正しくととのった状態
を表しています。つまり、植物の成長が整い

絶頂期にあり、しかもはつきりとした姿をあら
わしている状態です。一方の十二支にも前述
の五つの陰陽が割り当てられおり、亥は、水と
の関係を示しています。亥は、鬩(がいの、閉
ざすという意味)で、草木の生命力が種子(し
ゆし)に閉じこもり、次の原動力を蓄(たくわ
え)えている有様です。己亥は、どちらも力
がみなぎり、その力を蓄えているという組み合
わせです。さらに、土と水の性質を持つ力の

干支(えと)でもあります。今年、災害の
多かつた年でもありました。この「己亥」の
干支にあやかり、これら災害の元が抑えられる
こと、さらに、エネルギーに満ち溢れた、新た
な時代が来ることに期待がもてそうです。動
物では猪が当てられます。猪は、猪突猛進、
ただ突き進むだけではなく、木の幹に体をすり
付けて樹液を塗り、次いで地面に寝転んで砂を
付着させるという習性があります。これを繰
り返すと、肌がよろいのように固まって矢も立
たなくなるそうです。力がみなぎっていても
猪にあやかり、備えを万全にすることも大切で
はないでしょうか。毎年、干支にちなんだ、
書初めをしています。来年は、「亥」の入っ
た漢字を使った熟語を認(したた)めようかと
考えています。思い浮かぶのは、「刻(こく、
きざむ)」です。「刻真(こくしん)」、とい
う造語(ぞうご)を考えています。日々の歩

みが、真実を刻むものであつて欲しいと願いを
込めて認(したた)めます。御期待ください。
これからも、ぬくもりのある神社運営ができま
すよう御奉仕申し上げたいと思ひますので、お
力添えを宜しくお願い申し上げます。来年が
皆様方にとりまして幸多かりし事を心からお
祈り申し上げます。

◇十二月の祭典行事報告

▼月次祭

*十二月一日、十五日

▼大注連縄おろし *十二月二日

▼海士郷恵比須神社祈漁祭

*十二月三日

▼朝粥会 *十二月二十一日

▼天長祭 *十二月二十三日

▼田の首八幡宮大注連縄おろし

*十二月二十三日

▼大祓式、除夜祭、守札等清祓式

*十二月三十一日

◇十二月の宮司の行事会議等活動報告

▼八幡宮関係団体

◇維蘇志会十二月例会 *十二月八日